作家点描

井上　靖

講談社

作家点描

昭和五十六年二月十日第一刷発行

著者——井上 靖

©Yasushi Inoue 1981, Printed in Japan

発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二番二一　郵便番号一一二　電話東京〇三(九四五)一一一一　振替東京八一五九〇

印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——黒柳製本株式会社

定価——一三〇〇円

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

目

次

安西冬衛　安西冬衛の横顔　10
伊東静雄　「庭の蟬」と「夏の終り」　14
天風浪々　17
江藤淳　優れた伊東静雄論　22
大佛次郎　『つきじの記』を読んで　28
『帰郷』の頃　31
亀井勝一郎　『美貌の皇后』の重さ　38
河上徹太郎　揚州に於ける河上氏　44
川端康成　川端さんのこと　50
晩年の川端さん　53
川端さんの眼　1　57

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

川端さんの眼　2　59
『木精』を読んで　62
北杜夫
小林さんのこと　68
小林秀雄
「鷺江の月明」讃　74
佐藤春夫
北海道の佐藤先生　79
「スズメの誤解」　84
志賀直哉
晩年の志賀先生　90
藤村全集の意義　96
島崎藤村
『殉死』私見　100
司馬遼太郎
『蟹』の作者　104
庄野潤三
庄野潤三氏について　108

高見順　『死の淵より』　114
谷崎潤一郎　『細雪』讃　124
『吉野葛』を読んで　128
谷崎先生のこと　133
中島敦　『木乃伊』讃　138
『李陵』と『山月記』　142
中島健蔵　中島健蔵氏のこと　148
中野重治　中野さんの詩　154
中村光夫　「明治五年」について　160
丹羽文雄　『海戦』讃　166
野間宏　野間宏氏のこと　174

萩原朔太郎　「郷土望景詩」讃　180
詩人との出会い　184
舟橋聖一　舟橋さんの人と作品　190
「風景」と私　194
堀口大學　堀口先生のこと　198
丸山薫　丸山薫の詩　204
三好達治　「冬の日」讃　214
『測量船』と私　217
室生犀星　金沢の室生犀星　222
あとがき　227
初出一覧　228

作家点描

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

安西冬衛

安西冬衛の横顔

本稿の執筆に当って、一体『軍艦茉莉』の詩人に最初会ったのは何時、いかなる場所であったろうか、と思い返そうとするが「駅前の渚にびっくりするほど巨きい他国の星が澄」んでいる大陸の宵の口の小さい停車場で、極りない悲哀を冷厳に計量している作品の中の安西冬衛氏の姿のみが、眼にちらついてくるのである。それを追い払うと、今度は休暇で若い学生の影もない大学の留守に、歳晩の午前のひと時を「所謂憲兵的重質量感を盛った語彙に象眼されたゲルマンの荘重な法文をノートして」いる同じく作品の中の、この詩人の姿がはっきりと眼に映ってくるのである。

それほど安西冬衛は作品の中に生きており、それも塵ほども動かすことのできぬ正確さで、自分の姿を作品の中に見事に凍結させているのである。『軍艦茉莉』『渇ける神』『大学の留守』等の秀れた詩集の多くの作品の中に、いかにその本質的なプロフィルをはっき

りと彫りつけていることか。考えてみると怖ろしいことである。もはや氏について語るべき何ものも残されていないのだ。端厳な氏の性格、その敦厚な人柄、驚くべき博識、氏の俳句、氏の趣味、あるいはあの癖のある楷書の字体の清潔感まで——その尽くが既に氏自らによって、作品の底深く楔のように打ち込まれているではないか。作品の中に見る極めてリアルな氏の横顔に、徒らに何本かの罅を入れるに過ぎぬ愚かな役割を迂闊にも引受けてしまったことを、私は今更に滑稽に思うのである。

私はこれまでに新聞記者として夥しい数の文学者や芸術家に面接している。会う事が過去十年間の私の仕事であったのだ。私はたれに会ってもつとめて事務的に新聞記者としての仕事のみを遂行しようとする。少くともそう心掛けてきた。要らぬ疲労から自分を守ろうとする悲しい習性をいつか身につけているのである。併し例外として極くまれにそうした事務的な自己没却的な態度から、否応なしに立ち上らざるを得ない少数の人を知っている。安西冬衛もその一人である。いい加減な気持でその前に立つことも、言葉をきくこともできないのである。

古武士のような重厚精悍な氏の印象は極めて美しい。氏の肉体は常に周囲の空気を弾い

ている。何ものかに抵抗し、抵抗されているのである。おそらく何ものをも認めないであろう傲岸な、とでもいいたい精神の張りは、その肩に一番よく現われている。これはいうまでもなく、氏の詩心を刺戟するあらゆる事象の思念をもそのままでは尽く否定し、氏の卓抜な知性と感性が選択するそれらの持つ最も本質的要素によって、あらたに空間的、時間的に再構成せずにはいられぬ世にも美しい不逞な了見を抱くことに根ざしているのであろう。詩人である限り氏はあらゆる周囲のものと対決していなければならぬのだ。たれよりも穏やかな氏の話し振りの中に、たれよりも激しいものを感ずるのはこの為であろう。私は氏に会った後、いつも清冽な一種の興奮の中に落ち込んでしまうのだ。私もまた何かを為さねばならない、と。

私が雪国の高等学校の学生の頃そうであったように、今もなお一部の若い孤独な情熱にとって、この詩人の横顔は、独文典の習得より、もう少し大きい関心事であるに違いない。再び言おう、紛れもない安西冬衛氏の横顔は、詩集『大学の留守』に、特に「下市口にて」の美しい詩篇の中に発見できるのである。

伊東静雄

「庭の蟬」と「夏の終り」

好きな詩を選ぶということになると、なかなか難しい。手許にある『夏花』『春のいそぎ』『反響』の三冊の詩集の全作品に眼を通してみて、その中から一、二作を選び出すことの難しさを痛感した。どの作品も私は好きである。作者の澄んだ眼が、ある作では諦めの中に、ある作では憤りの中に坐っていた。「庭の蟬」「夏の終り」の二作は、伊東静雄の代表作とは言えないが、最も伊東静雄らしい伊東静雄がこの中には居る。

旅からかへつてみると
この庭にはこの庭の蟬が鳴いてゐる
おれはなにか詩のやうなものを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com